

## 2サムエル記1-3章 「サウルの死後」

### アウトライン

#### 1A ダビデの哀しみ 1

1B アマレク人の死刑 1-16

2B サウルとヨナタンの哀歌 17-27

#### 2A 内戦の始まり 2

1B ダビデの統一作業 1-11

2B ダビデとサウル家の戦い 12-32

#### 3A 統一の頓挫 3

1B ダビデ家の力の増加 1-11

2B アブネルの権力移譲 12-25

3B ヨアブの流血 26-39

### 本文

サムエル記第二を開いてください。私たちは今週からサムエル記第二を学ぶこととなります。サムエル記は元々一つの書物でしたので、第一と第二の話はまったく一つです。第一はサウルが死ぬことで終わりました。第二はサウルが死んだ後にどうなったかについて話しています。

#### 1A ダビデの哀しみ 1

1B アマレク人の死刑 1-16

1:1 サウルの死後、ダビデはアマレク人を打ち破って帰り、二日間、ツィケラグに滞在した。

私たちは前回の学びで、ペリシテ人とイスラエルとの戦いでダビデとサウルの両側からの話を同時進行で読みました。ダビデはペリシテ人アキシュの下でイスラエルとの戦いにお供しようとしていました。そしてサウルはペリシテ人との戦いで怯えて、霊媒のところに行き、サムエルを死者の中から呼び出してもらいました。サウルと息子たちはペリシテ人との戦いに負けて、死に絶えました。ダビデたちは、ツィケラグに戻ると子供や妻を含めてすべて、アマレク人から略奪されていました。そこで、彼らは急いでアマレク人を追跡し、すべてを奪還することができたばかりか、さらに多くを分捕ることができました。その後、ツィケラグにいて二日いたこととなります。

1:2 三日目に、突然、ひとりの男がサウルの陣営からやって来た。その着物は裂け、頭には土をかぶっていた。彼は、ダビデのところに来ると、地にひれ伏して、礼をした。1:3 ダビデは言った。「どこから来たのか。」彼はダビデに言った。「イスラエルの陣営からのがれて来ました。」1:4 ダビデは彼に言った。「状況はどうか、話してくれ。」すると彼は言った。「民は戦場から逃げ、また民の

多くは倒れて死に、サウルも、その子ヨナタンも死にました。」

ダビデは、着物を裂き、頭に土をかぶるという悲しみの姿勢を示しているこの男を見て、これは良くない知らせだと思って、丁重にこの男に問いました。事実、サウルとヨナタンが死んだという知らせをもたらしました。

1:5 ダビデは、その報告をもたらした若者に言った。「サウルとその子ヨナタンが死んだことを、どうして知ったのか。」1:6 報告をもたらした若者は言った。「私は、たまたま、ギルボア山にいましたが、ちょうどその時、サウルは槍にもたれ、戦車と騎兵があの方に押し迫っていました。1:7 サウルが振り返って、私を見て呼びました。私が『はい。』と答えると、1:8 サウルは私に、『おまえはだれだ。』と言いましたので、『私はアマレク人です。』と答えますと、1:9 サウルが、『さあ、近寄って、私を殺してくれ。まだ息があるのに、ひどいけいれんが起こった。』と言いました。1:10 そこで私は近寄って、あの方を殺しました。もう倒れて生きのびることができないとわかったからです。私はその頭にあった王冠と、腕についていた腕輪を取って、ここに、あなたさまのところに持ってまいりました。」

このアマレク人が語っているのは、嘘です。私たちはサムエル記第一の最後の章で、サウルが打たれて死にかけているのを、彼が道具持ちにとどめを刺してほしいと頼んだけれども、道具持ちが恐れてそれができなかったこと。そのためサウルは剣に自分の身を乗せて自害し、引き続き道具持ちも自害したことを告げています。アマレク人は、この死んだサウルと、また息子ヨナタンの第一発見者なのでしょう。そして、王冠と腕輪を持って来ました。そしてダビデの前で手柄を立てたいと思ったのです。

1:11 すると、ダビデは自分の衣をつかんで裂いた。そこにいた家来たちもみな、そのようにした。1:12 彼らは、サウルのため、その子ヨナタンのため、また、主の民のため、イスラエルの家のためにいたみ悲しんで泣き、夕方まで断食した。彼らが剣に倒れたからである。

このアマレク人が予期していたのと全く反対の反応をダビデは示しました。サウルの死を喜んだのではなく、かえって嘆き悲しんだのです。なんとという柔和さなのでしょう！サウルによってあれだけ苦しめられ、あれだけ善に対して悪で報いられたのに、サウルの不幸を聞くと激しく悲しんだのです。これこそが、無条件の愛です。主が、ご自分に反抗するユダヤ人たちに示された、憐れみの心です。「彼らは何をしているのか、分からないのです。どうか彼らの罪を赦してください。」と十字架上で祈られたイエス様の心です。私たちがどんなに悪い仕打ちを受けても、それに報いることなく、父なる神から、そしてキリストから流れる愛で自分の心を包み込みます。

1:13 ダビデは自分に報告した若者に言った。「おまえはどここの者か。」若者は答えた。「私はアマレク人で、在留異国人の子です。」1:14 ダビデは言った。「主に油そそがれた方に、手を下して殺

すのを恐れなかったとは、どうしたことか。」1:15 ダビデは若者のひとりを呼んで言った。「近寄って、これを打て。」そこで彼を打ち殺した。1:16 そのとき、ダビデは彼に言った。「おまえの血は、おまえの頭にふりかけられ。おまえ自身の口で、『私は主に油そそがれた方を殺した。』と言って証言したからである。」

このアマレク人は、極めて皮肉な形で死にました。ダビデから手柄を受けたくて嘘の報告をしたところが、その報告が、自分が処刑される根拠となったのです。ダビデの心には、キリストの心が見えます。それは自分で裁くということは、自分自身に裁きを招くということです。私たちは豊かに憐れみを受けたのだから、憐れみをもって人々に接するべきであります。「あわれみを示したことの無い者に対するさばきは、あわれみのないさばきです。あわれみは、さばきに向かって勝ち誇るのです。(ヤコブ 2:13)」これは命令であり、選択ではありません。私たちはキリスト者として罪の赦しと憐れみの中に生きる奉仕のあずかっており、その使命にあずかっています。

そしてダビデが、改めてお前は誰か？と質問して、「アマレク人」と答えているところは象徴的です。自分たちがつい数日前、アマレク人によって自分たちのものが奪い取られました。アマレク人は、イスラエル人から奪うという歴史を持っています。サムエルが神からの命令としてサウルに、滅ぼしつくせと告げていました。このアマレク人には、手柄を立てたいという思いと共に、イスラエル人に対するむさぼりの心、また命の軽視があったことは確かです。

## 2B サウルとヨナタンの哀歌 17-27

1:17 ダビデは、サウルのため、その子ヨナタンのために、この哀歌を作り、1:18 この弓の歌をユダの子らに教えるように命じた。これはヤシャルの書にしるされている。

ダビデは哀歌を作りました。そして「弓の歌」とありますが、実際は「弓」とだけあります。つまり、ユダの子らに弓を教えたのです。ダビデは、サウルとヨナタンの死を、弓を教えることによって伝えていったのです。ヨナタンは弓に練達した人物でした。弓を教えることによって、ヨナタンの残した信仰の偉業を伝えることができます。

私たちも、死んだ人についてどのような遺産を受け継いでいるでしょうか？チャック・スミス牧師は、父親については、会う人すべてにイエス様を証していた人としての記憶があります。だから、人々にイエス様を知らせていくという大切さを受け継ぎました。そして母親については、祈りを受け継ぎました。彼が幼い時から、自分が寝る時には必ず彼女が祈っている姿を見て寝ていました。起きても、お母さんは必ず家族の中で一番早く起きて、祈っている姿を見たそうです。

そして「ヤシャルの書」とありますが、ヨシュアがカナン人の王を追っている時に、日と月がとどまったことが記録されている書物としても登場します。今は残っていない書物ですが、イスラエルの戦いの記録だったのではないかと思います。

1:19 「イスラエルの誉れは、おまえの高き所で殺された。ああ、勇士たちは倒れた。1:20 これをガテに告げるな。アシュケロンのちまたに告げ知らせるな。ペリシテ人の娘らを喜ばせないために。割礼のない者の娘らを勝ち誇らせないために。1:21 ギルボアの山々よ。おまえたちの上に、露は降りるな。雨も降るな。いけにえがささげられた野の上にも。そこでは勇士たちの盾は汚され、サウルの盾に油も塗られなかった。

「イスラエルの誉れ」とはもちろん、サウルとヨナタンのことです。そして、「おまえの高き所」とはギルボア山のことです。そして興味深いことに、ギルボア山に雨が降るなどと言っていますが、今もギルボア山の多くの部分がはげ山になっています。これを見るたびに、イスラエルがペリシテ人に敗れたことを思い起こすことができるのです。

1:22 ただ、殺された者の血、勇士たちのあぶらのほかは。ヨナタンの弓は、退いたことがなく、サウルの剣は、むなしく帰ったことがなかった。1:23 サウルもヨナタンも、愛される、りっぱな人だった。生きていたときにも、死ぬときにも離れることなく、わしよりも速く、雄獅子よりも強かった。1:24 イスラエルの娘らよ。サウルのために泣け。サウルは紅の薄絹をおまえたちにまとわせ、おまえたちの装いに金の飾りをつけてくれた。

ヨナタンの弓の練達、そしてサウルの剣の練達を思い出しています。そして、彼らがいかに勇士であったかを思い出しています。あれだけサウルが悪いことをダビデに対して行ったのに、ダビデはこのことではなく、主がサウルを通して行なわれたことを思い出することができたのです。主にあって彼のよいところを思うことができたのです。ダビデにあるすばらしい特質です。ピリピ書のパウロの言葉を思い出します。「最後に、兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。(ピリピ4:8)」

1:25 ああ、勇士たちは戦いのさなかに倒れた。ヨナタンはおまえの高き所で殺された。1:26 あなたのために私は悲しむ。私の兄弟ヨナタンよ。あなたは私を大いに喜ばせ、あなたの私への愛は、女の愛にもまさって、すばらしかった。1:27 ああ、勇士たちは倒れた。戦いの器はうせた。」

この箇所だけ読むと、ダビデがヨナタンに恋愛感情があったのか？と誤解します。そうではありません。もしそんなことを言ったら、我々男性のキリスト者は、男性のイエス様を愛しているということが不自然だということになってしまいます。違いますね、男女の恋愛感情とは比較にならない真実な愛を知っているから、イエス様を愛しているのです。

同じようにヨナタンには、本来、妻との間になければならない、真実な誓いの愛を持っていました。自分が不利になろうとも、相手の利益のために動く意志を持っていました。さらに、約束は最後まで

で守りました。ダビデは、後にミカルと実際の妻との間で心が別れることを経験します。妻でさえ、そのような真実な愛を持っていなかったのです。女性との間にある恋愛感情ではなく、見た目で見断するような愛ではなく、それよりはるかに深い真実な愛を、ヨナタンを通して知りました。

## **2A 内戦の始まり 2**

### **1B ダビデの統一作業 1-11**

2:1 この後、ダビデは主に伺って言った。「ユダの一つの町へ上って行くべきでしょうか。」すると主は彼に、「上って行け。」と仰せられた。ダビデが、「どこへ上るのでしょうか。」と聞くと、主は、「ヘブロンへ。」と仰せられた。2:2 そこでダビデは、ふたりの妻、イスラエル人アヒノアムと、ナバルの妻であったカルメル人アビガイルといっしょに、そこへ上って行った。2:3 ダビデは、自分とともにいた人々を、その家族といっしょに連れて上った。こうして彼らはヘブロンの町々に住んだ。

サウルが死んだことで、ダビデは気になりました。イスラエルを治める人がいません。そしてもちろん、自分自身がイスラエルの王に選ばれていることを知っています。そのようなことが分かっているにもかかわらず、彼はへりくだって主に伺いました。ここがダビデの特徴の一つです。彼は思い込むことがありませんでした。自分の思いや判断が正しいという思い込みがありませんでした。ですから主にまず尋ねるといふ謙虚さがあったのです。そして尋ねてから、自分が考えていることが主の御心に沿っていることなのかどうかを確かめて一歩進んでいます。

ダビデは、ツィケラグという町にいました。そこはユダの町でしたがペリシテ人の支配下に入っていました。それでダビデはユダの町に行くべきかどうか尋ねました。すると「ヘブロンへ。」という回答が主からありました。ヘブロンは、アブラハム、イサク、ヤコブが葬られている墓のある町です。主が個人的にアブラハムに現れて、ご自分のイスラエルに対する計画を示された所です。それ以上ふさわしい所はありません。ダビデの治世がアブラハムの祝福の延長にあるのです。

そしてダビデが、妻ふたりと家族も共に連れていった、ということも強調されています。また自分と共にいた人々の家族もいっしょに連れて上った、とあります。

### **2:4a そこへユダの人々がやって来て、ダビデに油をそそいでユダの家の王とした。**

ユダ族の人々は、ダビデの身内です。彼らがダビデに油を注ぎました。ダビデとのつながりは血縁関係だけに限りません。彼は、ペリシテ人アキシユの下で働いている時も、ユダの町々から略奪しませんでした。さらに、アマレク人から分捕り物を持ってきた時は、等しくユダの町々にも分け合いました。このように神の真実と恵みをダビデは分かち合っていたのです。そこから出てくる自然の流れが、ダビデを王とすることだったのです。ここにダビデの肉の力はありません。御霊から来る権威、自然に従っていく神の権威だけがあります。



2:4b ヤベシュ・ギルアデの人々がサウルを葬った、ということがダビデに知らされたとき、2:5 ダビデはヤベシュ・ギルアデの人々に使いを送り、彼らに言った。「あなたがたの主君サウルに、このような真実を尽くして、彼を葬ったあなたがたに、主の祝福があるように。2:6 今、主があなたがたに恵みとまことを施してくださるように。この私も、あなたがたがこのようなことをしたので、善をもって報いよう。2:7 さあ、強くあれ。勇気のある者となれ。あなたがたの主君サウルは死んだが、ユダの家は私に油をそそいで、彼らの王としたのだ。」

ダビデは、サウルに尽くしたヤベシュ・ギルアデの人たちに善を行ないたいと言っています。そのことによって、彼らがダビデを王としてくれるよう促しています。ダビデは、身内のユダだけでなくイスラエルの人にも平和をもたらしたいと願ったのです。サウルに忠実な人々へのダビデの対応は剣ではなく、正反対で積極的な平和でした。「平和をつくる者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。(マタイ 5:9)」けれども、それはうまく行きませんでした。

2:8 一方、サウルの將軍であったネルの子アブネルは、サウルの子イシュ・ボシェテをマハナインに連れて行き、2:9 彼をギルアデ、アシュル人、イスラエル、エフライム、ベニヤミン、全イスラエルの王とした。2:10 サウルの子イシュ・ボシェテは、四十歳でイスラエルの王となり、二年間、王であった。ただ、ユダの家だけはダビデに従った。2:11 ダビデがヘブロンでユダの家の王であった期間は、七年六か月であった。

サウルの將軍であったアブネルが、サウルの子イシュ・ボシェテを擁立してしまったために、ユダ族以外の民はそちらを王としてしまったのです。このことによってもちろん戦いが始まります。ダビデ家とサウル家に戦いが始まります。

## 2B ダビデとサウル家の戦い 12-32

2:12 ネルの子アブネルは、サウルの子イシュ・ボシェテの家来たちといっしょにマハナインを出て、ギブオンへ向かった。2:13 一方、ツェルヤの子ヨアブも、ダビデの家来たちといっしょに出て行った。こうして彼らはギブオンの池のそばで出会った。一方は池のこちら側に、他方は池の向こう側にとどまった。

ギブオンはサウルの故郷であり、戦いの拠点でありました。

2:14 アブネルはヨアブに言った。「さあ、若い者たちを出して、われわれの前で闘技をさせよう。」ヨアブは言った。「出そう。」2:15 そこで、ベニヤミンとサウルの子イシュ・ボシェテの側から十二人、ダビデの家来たちから十二人が順番に出て行った。2:16 彼らは互いに相手の頭をつかみ、相手のわき腹に剣を刺し、一つになって倒れた。それでその所はヘルカテ・ハツリムと呼ばれた。それはギブオンにある。2:17 その日、戦いは激しさをきわめ、アブネルとイスラエルの兵士たちは、ダビデの家来たちに打ち負かされた。

アブネルもヨアブも、戦いにおいては有能な者たちでした。けれども、目的のためには手段を選ばず、というところがありました。全体で戦わないで、若者だけを出して戦わせようと言いました。アブネルとヨアブにとっては若者たちに武術の実地訓練でも与えた気分だったのかもしれませんが、な、だったかもしれませんが、全てが倒れてしまいました。そしてこれだけに終わらずに、全体の戦いも勃発したのです。そして戦いはダビデの家来たちのほうに向きました。

2:18 そこに、ツェルヤの三人の息子、ヨアブ、アビシャイ、アサエルが居合わせた。アサエルは野に  
いるかもしかのように、足が早かった。

ツェルヤはダビデの姉妹です(1歴代 2:16)。つまり、ヨアブ、アビシャイ、アサエルはダビデの甥になります。けれどもダビデが末の子だったので、年齢的には大差がなかったのではないかと思われ  
ます。この三人は、ダビデが逃げて間もなくしてアドラムの洞穴に隠れていた時に集まった四百人の中に入っていた  
かもしれません。とにかく有能な戦士ですが、あまりにも血が多い人々です。

2:19 アサエルはアブネルのあとを追った。右にも左にもそれずに、アブネルを追った。2:20 アブ  
ネルは振り向いて言った。「おまえはアサエルか。」彼は答えた。「そうだ。」2:21 アブネルは彼に  
言った。「右か左にそれて、若者のひとりを捕え、その者からはぎ取れ。」しかしアサエルは、アブ  
ネルを追うのをやめず、ほかへ行こうとしなかった。2:22 アブネルはもう一度アサエルに言った。  
「私を追うのをやめて、ほかへ行け。なんでおまえを地に打ち倒すことができよう。どうしておまえ  
の兄弟ヨアブに顔向けができよう。」2:23 それでもアサエルは、ほかへ行こうとはしなかった。そ  
れでアブネルは、槍の石突きで彼の下腹を突き刺した。槍はアサエルを突き抜けた。アサエルは  
その場に倒れて、そこで死んだ。アサエルが倒れて死んだ場所に来た者はみな、立ち止まった。

アブネルはアサエルを殺したくありませんでした。アサエルを殺せば、ヨアブからの復讐を予期し  
なければならなかったからです。けれどもあまりにも近づいたので殺さざるを得ませんでした。

私たちは、正しくありすぎることは、出すすぎるにつながることを知る必要があるでしょう。アサ  
エルの考えていることは正しいです。アブネルを殺せば戦いはそれで終わりです。けれども、自分  
自身にアブネルと戦うには力がないことを忘れていました。かもしかのように早い足に過信してい  
ました。私たちも時に、自分の能力を過信します。けれどももっと大切なこと、戦い以上に平和を求  
めて譲歩することを忘れていたのです。

2:24 しかしヨアブとアビシャイは、アブネルのあとを追った。彼らがアマの丘に来たとき太陽が沈  
んだ。アマはギブオンの荒野の道沿いにあるギアハの手前であった。2:25 ベニヤミン人はアブネ  
ルに従って集まり、一団となって、その丘の頂上に立った。2:26 アブネルはヨアブに呼びかけて  
言った。「いつまでも剣が人を滅ぼしてよいものか。その果ては、ひどいことになるのを知らないの

か。いつになったら、兵士たちに、自分の兄弟たちを追うのをやめて帰れ、と命じるつもりか。」  
2:27 ヨアブは言った。「神は生きておられる。もし、おまえが言いたさなかつたら、確かに兵士たちは、あしたの朝まで、自分の兄弟たちを追うのをやめなかつたらう。」  
2:28 ヨアブが角笛を吹いたので、兵士たちはみな、立ち止まり、もうイスラエルのあとを追わず、戦いもしなかつた。

ヨアブとアビシャイのアブネルに対する戦いは、王のための大義以上になりました。自分の兄弟の血の復讐になりました。けれどもアブネルが停戦を呼びかけたので、現実的に疲労していきることのできない事実から、ヨアブは同意しました。

2:29 アブネルとその部下たちは、一晩中アラバを通って行き、ヨルダン川を渡り、午前中、歩き続けて、マハナインに着いた。  
2:30 一方、ヨアブはアブネルを追うのをやめて帰った。兵士たちを全部集めてみると、ダビデの家来十九人とアサエルがいなかつた。  
2:31 ダビデの家来たちは、アブネルの部下であるベニヤミン人のうち三百六十人を打ち殺していた。  
2:32 彼らはアサエルを運んで、ベツレヘムにある彼の父の墓に葬った。ヨアブとその部下たちは、一晩中歩いて、夜明けごろ、ヘブロンに着いた。

アブネルは本拠地マハナインに、ヨアブたちはヘブロンに戻りました。戦いは圧倒的にダビデ家にあります。死んだのは二十人ですが、サウル家は三百六十人死んでいます。こうして戦いはダビデ家に有利になっていました。

### **3A 統一の頓挫 3**

#### **1B ダビデ家の力の増加 1-11**

3:1 サウルの家とダビデの家との間には、長く戦いが続いた。ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなった。

停戦をしましたが、また続けて戦いが始まりました。その中でダビデ家が強くなってはいますが、それでもサウル家は抵抗しています。これが私たちの内なる戦いでもあるのです。確かに御霊によって自分の肉に打ち勝っています。けれども、自分の肉をあきらめることができません。それで内に葛藤が起こるのです。

3:2 ヘブロンでダビデに子どもが生まれました。長子はイズレエル人アヒノアムによるアムノン。  
3:3 次男はカルメル人でナバルの妻であったアビガイルによるキルアブ。三男はゲシュルの王タルマイの娘マアカの子アブシャロム。  
3:4 四男はハギテの子アドニヤ。五男はアビタルの子シェファテヤ。  
3:5 六男はダビデの妻エグラによるイテレアム。これらはヘブロンでダビデに生まれた子どもである。

ダビデはヘブロンにおいて、自分の国の備えをしていました。それは息子を多く持つということ



す。それは当時の王国においては当然行なわれていることでした。それでダビデは二人の妻、アヒノアムとアビガイルだけでなく、他にも妻を娶っています。

このこと自体は間違っていないと私は思います。ここを「多くの妻を持っている」と言って咎める人がいますが、私は文化的に許容されるのではないかと思います。けれども別の意味でダビデは誤ったことを行なったのではないかと思っています。それは、自分自身が対処できないことを行なった、ということです。ダビデの家に、後に剣が入っていきます。息子が自分に反逆するのです。アムノン、アブシャロム、そして後にアドニヤも剣で失います。そしてダビデが息子たちを戒めることができなかったことが、列王記第一 1 章 6 節に記載されています。

私たちは形を整えようとするがばかりに、神によって与えられたこと以上のことをしてしまう傾向があります。そこから勇気をもって、主によって語られたことのみを行なっていくことに戻ることが必要です。「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。(ローマ 12:3)」

3:6 サウルの家とダビデの家とが戦っている間に、アブネルはサウルの家で勢力を増し加えていた。3:7 サウルには、そばめがあって、その名はリツパといい、アヤの娘であった。あるときイシュ・ボシェテはアブネルに言った。「あなたはなぜ、私の父のそばめと通じたのか。」3:8 アブネルはイシュ・ボシェテのことばを聞くと、激しく怒って言った。「この私が、ユダの犬のかしらだとも言うのですか。今、私はあなたの父上サウルの家と、その兄弟と友人たちとに真実を尽くして、あなたをダビデの手に渡さないでいるのに、今、あなたは、あの女のことで私をとがめるのですか。3:9 主がダビデに誓われたとおりのことを、もし私が彼に果たせなかったなら、神がこのアブネルを幾重にも罰せられますように。3:10 サウルの家から王位を移し、ダビデの王座を、ダンからベエル・シェバに至るイスラエルとユダの上に堅く立てるということを。」3:11 イシュ・ボシェテはアブネルに、もはや一言も返すことができなかった。アブネルを恐れたからである。

午前で学んだ通りです。サウル家の中に大きな変化がありました。アブネルがダビデとの戦いの中で勢力をサウル家の中でまし加えているのですが、その一つに、サウルの娘のそばめを自分が通じていたということがあります。イシュ・ボシェテがそれを言い出したら、それで逆切れしてしまいました。

このこと自体は褒められたことではありませんが、これをきっかけにして、彼は今まで反発していたことに終止符を打ったのです。つまり、全イスラエルをダビデに引き渡さないでいる、ということです。このしがみつきがもはや馬鹿馬鹿しくなって、それでダビデに権力を移行しようと決意したのです。午前礼拝で学んだように、私たちにも嫌になるような事柄が必要になる時があります。これが神の懲らしめの目的の一つです。「すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえっ

て悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。(ヘブル 12:11)」

## 2B アブネルの権力移譲 12-25

3:12 アブネルはダビデのところを使いをやって言わせた。「この国はだれのものでしょう。私と契約を結んでください。そうすれば、私は全イスラエルをあなたに移すのに協力します。」3:13 ダビデは言った。「よろしい。あなたと契約を結ぼう。しかし、それには一つの条件がある。というのは、あなたが私に会いに来るとき、まずサウルの娘ミカルを連れて来なければ、あなたは私に会えないだろう。」3:14 それからダビデはサウルの子イシュ・ボシェテを使いをやって言わせた。「私がペリシテ人の陽の皮百をもってめとった私の妻ミカルを返していただきたい。」3:15 それでイシュ・ボシェテは人をやり、彼女をその夫、ライシュの子パルティエルから取り返した。3:16 その夫は泣きながら彼女についてバフリムまで来たが、アブネルが、「もう帰りなさい。」と言ったので、彼は帰った。

アブネルはダビデのところに行きました。ダビデは一つの条件を付けましたが、サウルの娘ミカルです。ダビデが逃げている時に、サウルはパルティに与えたとサムエル記第一 25 章の最後に書いてあります。サウルはこのことによって、ダビデと絶縁していたのです。ですからダビデはミカルと復縁することによって、自分がサウルの婿であることを示すことができます。そうすれば、ダビデに対するイスラエル人の印象が変わります。サウルではなくダビデが王となってもそれを受け入れやすいです。

3:17 アブネルはイスラエルの長老たちと話してこう言った。「あなたがたは、かねてから、ダビデを自分たちの王とすることを願っていたが、3:18 今、それをしなさい。主がダビデについて、『わたしのしもべダビデの手によって、わたしはわたしの民イスラエルをペリシテ人の手、およびすべての敵の手から救う。』と仰せられているからだ。」

アブネルは、サウル家に仕えるという手前、こうしたイスラエルの長老たちの意見も抑えていました。すでにダビデを王とすることは、全イスラエルに浸透していたのです。それをアブネルが最後のあがきをしていただけなのです。

3:19 アブネルはまた、ベニヤミン人とじかに話し合ってから、ヘブロンにいるダビデのところへ行き、イスラエルとベニヤミンの家全体とが望んでいることをすべて彼の耳に入れた。3:20 アブネルが二十人の部下を連れてヘブロンのダビデのもとに来たとき、ダビデはアブネルとその部下の者たちのために祝宴を張った。3:21 アブネルはダビデに言った。「私は、全イスラエルをわが主、王のもとに集めに出かけます。そうして彼らがあなたと契約を結び、あなたが、望みどおりに治められるようにしましょう。」それでダビデはアブネルを送り出し、彼は安心して出て行った。

これによって、無血の統一ができます。戦わずして、ダビデを王とする統一イスラエル国を建てるのできるのです。アブネルは祝宴によって良い待遇を受けました。このように、自分に死んで、自分を明け渡してしまった人には神は平安を与えて、祝福してくださいます。放蕩息子の時を思い出してください、自分を捨てて父のところに戻ったら、和解が成り立ったばかりでなく、祝宴が開かれて息子の地位が回復したのです。けれども、この恵みに同意できない人物がいました。アブネルを憎んでいるヨアブがいました。

3:22 ちょうどそこへ、ダビデの家来たちとヨアブが略奪から帰り、たくさんの分捕り物を持って来た。しかしそのとき、アブネルはヘブロンでダビデのもとにはいなかった。ダビデがアブネルを送り出し、もう彼は安心して出て行ったからである。3:23 ヨアブと彼についていた軍勢がみな帰って来たとき、ネルの子アブネルが王のところに来たが、王がアブネルを送り出したので、彼は安心して出て行った、ということがヨアブに知らされた。3:24 それでヨアブは王のところに来て言った。「何ということなされたのですか。ちょうどアブネルがあなたのところに来たのに、なぜ、彼を送り出して、出て行くままにしたのですか。3:25 ネルの子アブネルが、あなたを惑わし、あなたの動静を探り、あなたのなさることを残らず知るために来たのに、お気づきにならなかったのですか。」

ヨアブは、アブネルに個人的な恩讐の念はありましたが、それ以上にこれまで敵であったアブネルがダビデの国で仕えることなどできるはずがないという、人間的な判断をしたからに他なりません。彼は、神の恵みを知りませんでした。ダビデがアブネルに手を伸ばした、その背後にある恵みを理解しませんでした。恵みを知らないとどうなるのでしょうか？裁きしかありません。流血しかありません。私たちの生活でももちろん流血はないですが、それでも対人関係の中で流血のような痛みは伴うでしょう。それは恵みを受け入れていないために起こっているのです。

### 3B ヨアブの流血 26－39

3:26 ヨアブはダビデのもとを出てから使者たちを遣わし、アブネルのあとを追わせ、彼をシラの井戸から連れ戻させた。しかしダビデはそのことを知らなかった。3:27 アブネルがヘブロンに戻ったとき、ヨアブは彼とひそかに話すと見せかけて、彼を門のとびらの内側に連れ込み、そこで、下腹を突いて死なせ、自分の兄弟アサエルの血に報いた。

ヨアブは、ダビデの忠実な家臣であったのに一つは恵みを悟らなかったこと、もう一つは赦しを与えられなかったことによって、不忠実になりました。私たちも同じです。私たちが、自分の敵であったものを祝福するという恵みを知らなければ、また、罪を赦してないもののようにみなすという赦しがなければ、それはキリストの権威を逸脱する越権行為だということです。キリストに直接的に不従順になっているということです。

3:28 あとになって、ダビデはそのことを聞いて言った。「私にも私の王国にも、ネルの子アブネルの血については、主の前にとこしえまでも罪はない。3:29 それは、ヨアブの頭と彼の父の全家に

ふりかかるように。またヨアブの家に、漏出を病む者、らい病人、糸巻きをつかむ者、剣で倒れる者、食に飢える者が絶えないように。」3:30 ヨアブとその兄弟アビシャイがアブネルを殺したのは、アブネルが彼らの兄弟アサエルをギブオンでの戦いで殺したからであった。

ダビデはヨアブとその家を呪っています。けれども、この呪いは彼自身の感情の発露ではなく、主によって与えられたものです。罪を犯していない者への血の復讐は、モーセの律法に禁じられています。アブネルは確かに殺しましたが、純粋に自己防衛でした。血の復讐はしてはならないのです。

3:31 ダビデはヨアブと彼とともにいたすべての民に言った。「あなたがたの着物を裂き、荒布をまとい、アブネルの前でいたみ悲しみなさい。」そしてダビデ王は、ひつぎのあとに従った。3:32 彼らはアブネルをヘブロンに葬った。王はアブネルの墓で声をあげて泣き、民もみな泣いた。3:33 王はアブネルのために悲しみ歌って言った。「愚か者の死のように、アブネルは死ななければならなかったのか。3:34 あなたの手は縛られず、あなたの足は足かせにつながれもせず。不正な者の前に倒れる者のように、あなたは倒れた。」民はみな、また彼のために泣いた。3:35 民はみな、まだ日のあるうちにダビデに食事をとらせようとしてやって来たが、ダビデは誓って言った。「もし私が、日の沈む前にパンでも、ほかの何物でも味わったなら、神がこの私を幾重にも罰せられますように。」

ダビデはまたしても泣かなければいけませんでした。サウルの死を泣いたダビデは、同じようにして彼の将軍アブネルの死を泣かねばなりませんでした。平和を求めるのにはリスクが伴います。自分の意志を貫くのではないので、自分のしようとしていることがこのように人間的思惑で破綻してしまいます。主がなされようとしていることを、みすみす自分の前で妨げられることを目撃しなければならないのです。けれども、このように罪のために泣くことに私たちは徹しなければいけません。なおのこと、平和の道を選ぶことに徹しなければいけません。自分の力で事を行なうことを拒まなければいけません。このことによって、本当に悪が暴かれていきます。ダビデではない違う者からこの悪が出てきたことを、みなが知るようになります。

3:36 民はみな、それを認めて、それでよいと思った。王のしたことはすべて、民を満足させた。3:37 それで民はみな、すなわち、全イスラエルは、その日、ネルの子アブネルを殺したのは、王から出たことではないことを知った。

ダビデの心からの悲しみは、全イスラエルに平和をもたらしました。ダビデは、自分の心を痛めました。その結果、他の人々の心を傷つけるのを回避させました。他の人々を建て上げることに貢献できました。ですから、私たちは自己主張をするのではなく、自己否定をすべきです。それが最善の近道なのです。自己主張すれば心に分裂が及びますが、自己否定すれば人々の思いが一つにされていきます。

3:38 王は家来たちに言った。「きょう、イスラエルでひとりの偉大な将軍が倒れたのを知らないのか。3:39 この私は油そそがれた王であるが、今はまだ力が足りない。ツエルヤの子らであるこれらの人々は、私にとっては手ごわすぎる。主が、悪を行なう者には、その悪にしたがって報いてくださるように。」

これからダビデは、軍閥政治に悩まされます。「ツエルヤの子ら」とはヨアブとアビシャイことです。アビシャイについては、ダビデは自分が強く制することができましたが、ヨアブは違いました。彼は能力がありすぎました。ダビデが事を行なう前に問題を解決しました。ダビデが平和によって治めたいと願っているのに、アブネルの件にあるように人間的な思惑ですみやかに対処しました。それによって、物事は安定し、前進しているように動きます。けれども、ダビデの国に決定的に必要な平和と正義を凌駕して、事を進めようとしていくのです。実力があるので、ダビデはどうすることもできないのです。

そこでダビデは、「主が、悪を行なう者には、その悪にしたがって報いてくださるように。」と言っています。自分には王であるのに裁くことさえできない。だから、主ご自身が裁かれるように、と祈っています。これは正しい祈りです。私たちにはうめきがあります。正義を行使したいと願っても、能力がないのです。けれども、必ず主がこの地上で行なっていることに対して報いを与えられます。「若い男よ。若いうちに楽しめ。若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心のおもむくまま、あなたの目の望むままに歩め。しかし、これらすべての事において、あなたは神のさばきを受けることを知っておけ。(伝道者 11:9)」「こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。(ローマ 14:12)」

私たちはダビデと同じように、柔和な道を進むでしょうか？それとも、ヨアブと同じように自分の能力を行使しつづけるでしょうか？各々に神の裁きがあります。ぜひダビデの道を選んでください。その道はミカの預言の中にもあります。「主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。(ミカ 6:8)」